

日本中のお友だちから、あんなにたくさんの手紙や品物が送られてきたと知ったとき、私は、はずかしくなりました。今まで日本各地の不幸な人に、手紙を出そうと考えて書いたのに、ポストにはいれなかったからです。そして特に盲学校の人たちの手紙を読んだときは不自由なお友だちと思つたせいか、読んでいて、苦しさに負けてはいけなひのだと思ひました。

あんなにたくさん品物のなかには、貧しくてその日の生活も窮屈な人たちが送つてくださった物があつたのです。大西山の山くずれでケガをした私のおばさんの所へは、やる物がないからといつて自分の着ていたものを、
「洗つて使つてください。」といい、ぬいでいった人がいたそうです。

こういう考えの人の物は、どんなに古くてもうれしいものです。私はきつとそのようなりっぱな人からの品物がたくさんあつたのではないかと思ひます。

あのような災害のときには人の真心が一番ほしいものです。苦しい時には何かたよりたい気になるものです。ひとりでも多くの人に何か心の中のことをぶちまけて話してしまいたいとだれもが思つたことでしょう。少なくとも私はそうでした。

ちやうどお見舞の手紙に礼状をだしたら、ある人から二度目の便りもきました。私は文通はしていませんでしたが、その人とは今まで三回ほどやりとりしました。手紙の内容もその人の成績やその地方の地理だけでなく、何でも話せられる友だちでした。

これによつて私は日本中にはきつとよい友だちが大ぜいいるんだらうなあと思ひました。そして送つてくださった見舞の手紙、品物、お金などから、貧しくて苦しくても、自分のことばかり考へていない人が大ぜいいることも知りました。